

京都学園大学が2019年4月、「京都先端科学大学」に

グローバルな視野と実践力を持つ 「トンガリ人材」を育てる

京都学園大学は、日本電産株式会社の創業者でもある永守重信理事長の下、社会のニーズに一層応える教育を行う大学へと飛躍するための改革を加速させている。

2019年4月、「京都先端科学大学」に生まれ変わり、20年4月には、世界的に需要が高まっているモーター技術者の育成に力を入れる工学部を新設予定だ。

突出した能力を持つ「トンガリ人材」の育成を目指し、どのような教育の充実を図っているのか。

同大学の現在とこれからの、19年度、学長に就任予定の前田正史副学長に聞いた。

社会がこぞって 人材を求める大学を目指す

京都学園大学は、経済経営・健康医療・人文・バイオ環境の4学部を有する総合大学だ。2015年度、亀岡キャンパスに加え、京都太秦^{うずまさ}に新キャンパスを建設して健康医療学部を設置。18年度には、世界有数の総合モーターメーカー、日本電産株式会社の創業者である永守重信氏が理事長に就任し、産業界のニーズに対応すべく教学改革を加速させている。創立50周年を迎える19年度には、「京都先端科学大学」に名称変更し、20年度には工学部を新設する予定だ。

「先端科学」と言うと、理系の大学をイメージするが、同大学においては、「科学」は理系に限らず「学問全般」を、「先端」は「トンガリ」を意味する。世界の先頭を走る大学となり、突出した能力を持って世界を変える人材を育てる。そして、世界中の学生が入学を希望し、社会がこぞって人材を求める大学——そうした大学を目指している(図1)。

改革の背景には、社会のニーズに
応える大学教育をしたいという思い
がある。次期学長に就任予定の前田



京都学園大学副学長
前田正史 まえた・まさふみ
東京大学理事・副学長等を経て
2018年度から現職。19年度、
学長に就任予定。

正史副学長はこう語る。

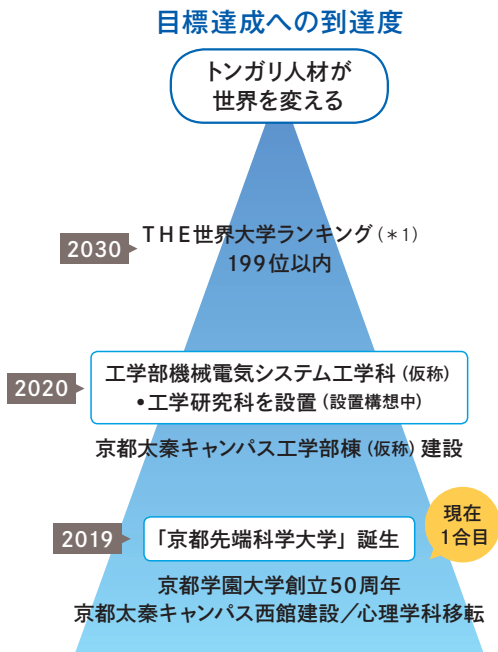
「少子化の中、限られた人的資源を生かしていくためには、産業界のニーズに合った資質・能力を若者に育むことが必要であり、それが社会の活力を生み出すことにもつながります。本学で学び、自信を持って社会に羽ばたいてほしいと考えています」

実践的な英語力を育成 海外インターンシップも実施

同大学が最も力を入れているのは、英語教育改革だ。産業界が求める「使える英語力」を育むため、「ベルリッツ」と提携し、19年度から実践的な英語教育プログラムを行う。入学後、半年間は1時間目に必修科目「英語コミュニケーション」を置き、徹底的に英語力を磨く。最終的には卒業生全員が英語を使える状態を目指す。

そして、「使える体験」の充実も図る。その1つ、海外インターンシップでは、海外43か国にある日本電産の事業所を活用し、3か月〜1年間

図1 京都学園大学の目標と到達度



*大学資料を基に編集部で作成。

図2 工学部の学びの特色

分野	内容
工業数学・物理学を徹底学習	低回生時に専門領域の基盤となる工業数学・物理学の講義と演習を重視し、洞察力を養う。標準的な工学部カリキュラムの1.5倍の時間とする。
実習・演習・PBL型学習に挑戦	個人ワーク(演習)とグループワーク(実習・PBL)に繰り返し取り組み、専門領域の理解と、考察力・実践力を養う。
コースツリーで専門性を育む	制御工学、モーター工学、電池工学、パワーデバイス工学などの専門科目から、ロボット分野、電気自動車分野など、将来の進路に合わせて適切に選択して履修することができる。
電子教材を積極的に活用	学生一人ひとりがパソコンあるいはタブレット端末を使用し、講義・演習・実験・自宅学習で、専門的な科学技術計算ソフトウェアや電子教材を駆使することで、効率的に専門分野の力を養う。
キャップストーンで総仕上げ	3回生と4回生で2回、企業から提示された課題に半年間の時間をかけて取り組む「総合的な経験をする実践的教育プログラム：キャップストーン」を実施。

*大学資料を基に編集部で作成。

「学生には、常に『トングリ人材が世界を変える』を持つことを期待しています。そのためには、自信のあることを一つ一つすることが大切です。そうすれば心に余裕が生まれ、自分を伸ばしたい、苦手な分野に取り組もうという意欲が湧いてくるでしょう。好きなものをとことん追究する楽しみも味わってほしいと思います」(前田副学長)

*1 イギリスの高等教育専門誌『Times Higher Education』が、年1回発表する世界の大学ランキング。「教育」「研究」「被引用論文」「産業界からの収入」「国際性」を評価指標とする。

のインターンシップを行う。「語学学校に数週間通う程度の留学では、異文化理解は十分にできません。中長期の海外インターンシップで、海外でのモノづくりや仕事のあり方、文化や価値観の違いを肌で感じ、その経験を社会で生かしてもらおうのがねらいです」(前田副学長)

ほかに、数的処理能力や読解力・表現力、コミュニケーション力を高める教養科目を設置予定だ。実務にも必要なそれらの資質・能力を身につけながら、最終的には、自分自身で「スキルを生み出す力」を備えた人材になってほしいと、前田副学長は語る。「知識・技能の中には、今は通用し

ていても、すぐに古びてしまうものもあります。本学で、多様な学びや経験を通して、自分にたくさん引き出しをつくり、卒業後、働きながら新しい知識・技能を自分で獲得したり、生み出したりする力を身につけてほしいと考えています」

**世界で活躍できる
モーター技術者を育成**

20年度には工学部機械電気システム工学科(仮称)の新設を計画 중이다。その目的は、「産業の米」とも言えるモーターの技術者の育成にある。今後、電気自動車やロボット、ドローン

など、モーターの需要は大幅な拡大が見込まれている。その一方、モーター分野の人材は世界的に不足しており、現場が求める技術者・研究者の育成が急務だ。さらに、小型コンピューター内蔵のモーターの開発も進んでおり、モーター技術者には機械や電気とともに、半導体、通信、材料などの幅広い知識が求められる。同部では、第一線の技術者による授業、協働型プロジェクトにより卒業認定を行う実践重視の教育で、産業界が求める即戦力の育成を目指す(図2)。

学内の学部間連携も図っていくと、前田副学長は語る。

「科学技術の根底には、ヒューマニ

ティーがあります。工場の産業用ロボットも、医療現場で活躍する介護ロボットも、現場では必ず人が介在します。人間の心や身体を理解していなければ、適切な指示を出せず、安全確保も図れません。サイエンスとヒューマニティーの連携により、人に優しい環境をデザインできるのです」

具体的には、健康医療学部との医療マシンの共同開発、人文学部との人間心理を反映させたロボットの研究、経済経営・健康医療学部とのビッグデータの解析による社会保障制度の研究などが想定されている。

また、全学的に外国人留学生を増やす方針だ。工学部では、将来的に学生の半数を外国人留学生にする考えで、外国人教員による英語での授業も開講を予定しており、キャンパスが国際的な雰囲気になると予想される。